

論文要旨

氏名

阿部朋恒（あべともひさ）

題目

中国西南部少数民族ハニにおける村落と共同性をめぐる民族誌的研究

要旨

本論は、中国雲南省南部のハニ族村落社会におけるフィールドワークにもとづき、国家への包摂とグローバリゼーションへの接合が同時に進むなかにあつてなお生活の場としての村落を基盤として紡がれる共同性を、その変異と複層に着目することで描き出す民族誌的研究である。

雲南省から東南アジアに跨る巨大な山域には、20世紀中葉に至るまで国家による統制から自らを遠ざけ続けたさまざまな民族集団が居住してきたとされる。ハニもまたその一つに数えられ、山間部に散在する村落を最大の社会単位として歴史を歩んできた。近代国家への編入後も、長く続いた人口移動を制限する政策のもと、人々の生活の場はなお村落を中心としたものであり続けた。しかしながら、1980年代に本格化する〈改革開放〉への政策転換後には中国全土を縦横に結ぶ人口流動化と市場経済化が急速に進展し、ハニの村落社会もまたそのなかに組み込まれていく。

2010年代半ばにフィールドワークを通じて筆者が目当たりにした日常とは、そうした社会変化を味方につけて、より豊かな生活を実現しようとする実践の東にほかならない。就労機会を求めて都市との間を往来し、市場を介して手にする便利なモノを歓迎する人々の関心は、明らかに村落の外へと向かっていた。しかしながら、村落に基礎づけられる共同性とは、むしろそうした外部社会との接合面において際立った存在感をみせるものでもある。さまざまなモノや言説、制度との接触を対面的状況のなかで解釈し、取捨選択していく再帰的实践は、その都度“われわれ”の境界を喚起するからである。生活の文脈に即して集合的になされるそうした再帰的实践によって客体化される共同性は、伝統的な組織や儀礼への参与によって確認される「共同体」と重なりつつも、その外延を限定させることなく刷新させ続けるものである。本論では、ハニの村落生活のなかに浮かび上がるさまざまな共同性を、以下の各章の民族誌的記述を通じて描く。

序章ではまずハニおよび調査地について概観した上で、関連する先行研究を検討しつつ本論の位置づけを明らかにした。人類学における近年の共同体論においては、意味や象徴のシステムからなる文化を内面化する舞台装置として共同体を定位することへの批判から、近代的な状況のなかで偶発的かつ状況的に構築される共同性の多様なありようが注目されてきた。このような視座は、従来ハニをめぐる民族誌的研究を相対化するにあたって有

効であると同時に、まさに近代的状況に直面する今日のハニの生活を記述するための補助線となる。しかしながらそこでは、偶発的な出会いによってさまざまな局面においてとり結ばれる社会関係の創発的側面が強調される一方で、村落をはじめとする在地共同体の内部において生じる適応的实践はかならずしも議論の俎上に載せられてこなかった。本章ではこのことを指摘した上で、在地性（ローカリティ）と民族性（エスニシティ）を自明な所与として備えたハニの村落において涵養される共同性を民族誌的に記述することが、従来の研究に対する理論的貢献となるとの主張を展開した。

第一章「儀礼の流行 —— 象徴世界と日常生活の接合」では、近年かつてなく頻繁に行われるようになってきている世帯儀礼について検討した。調査地の今日的な文脈において、儀礼はエスニック・アイデンティティを喚起する象徴世界への「呼びかけ」がなされる最も顕著な場面であると同時に、日常生活を支える社会関係を構築するための格好の契機ともなっている。本章では、世帯儀礼がしばしば犠牲獣の肉をもって客を饗応することを目的として催されることに着目し、にわかには活況を呈する儀礼の流行を、単純な伝統や宗教の復興現象としてではなく、生活の必要に応じて新たな共同性を生起させる集合実践として捉える視点を提示した。

第二章「共同性の構築 —— 村落の“キョウダイ”関係の想起」では、調査地において複数の村落を包括する紐帯を強調する言説が出現していることを指摘した。先述のようにハニは伝統的に村落を跨ぐ社会単位を形成してこなかったとされるが、広域的な行政区分に沿って実施される交通網の整備や農村開発プロジェクトの進展とともに、現在では村落の境界を超えた社会関係が要請されるようになってきている。本章では、そうした広域的な紐帯を正統化するローカルな論理として12の村落を「キョウダイ」とみなす歴史記憶が想起されていることに注目し、新たな輪郭をもつ共同性が想像されていく過程を検討した。

第三章「生活の変化 —— “外のモノ”の受容」では、調査地の人々が経験する社会変化を、人やモノ、情報の移動に着目して描いた。出稼ぎの常態化による労働人口の流出と市場経済の浸透にともなう商品化されたモノの流入は、おおむね前世紀末以降、村落生活を根底から変え続けてきた。本章前半ではまず、出稼ぎに従事する若者たちが同郷コミュニティを基盤として都市での生活戦略を成り立たせていることを描き、村落と都市を跨いで結ぶ人と情報の往還のもとに社会変化への対応がなされる状況を指摘した。さらに後半では村落に視座を差し戻し、“外”に由来するモノの受容をめぐる語りによって“われわれ”の生活の変化が文脈化されていることに注目した。本章では、外部社会との継続的な接合のなかでこそ浮かび上がる共同性の境界を跡付け、その多層性を指摘した。

第四章「たばこの配り方 —— “ヨリ”の振幅」では、調査地の人々が社会関係を表現する具体的行為のひとつとなっているたばこの交換に焦点を当てた。本来たばこは“外”に由来するモノだが、今日では親族関係にまつわる“ヨリ”（伝統、しきたり、慣習）への帰属を可視化する行為を成り立たせる道具立てとして、社交の場において欠かすことのできないものとなっている。本章では、“外”のモノが“われわれ”の伝統を体現する行為のな

かに組み込まれていく過程を具体的に検討することで、通時的な共同性の変異を指摘した。

第五章「外からのまなざし ——知識・制度との接触と「村」の境界」では、漢語概念のハニ語への翻訳過程を検討した。2013年にハニの名を冠する世界遺産が誕生したことを契機として「世界遺産」や「ハニ族文化」をめぐる新たな政治的言説が流布されるようになったが、調査村落の人々はそこに巻き込まれることなく、生活にもとづく関心をもとに独自の解釈を生み出していった。本章では、漢語としての「文化」とハニ語で語られる“ヨリ”（伝統、しきたり、慣習）の差異についての分析をもとに、主流言説に連なる回路を閉じたままにローカルな解釈が生成されていることを指摘した。

終章「生活の場に潜在する共同性」では、以上の民族誌的記述をあらためて振り返り、従来の研究との接合を試みた。調査地の人々の日常は、儀礼のみならず日常におけるさまざまな局面においても、地域や村落への帰属を問う実践に満ちていた。その境界は外部社会との接触を契機として暫定的に現れるものではあったが、繰り返し反復される度に確かな納得のもとで了解される。それは対面的な状況や具体的な相互行為をかならずしも伴わないという点において想像されたものであると同時に、空虚な記号のみに依拠するものでもない。本章では以上の検討を通じて、人々が変化のなかにある生活を共有する場としてある限りにおいて、ハニの村落が新たな共同性を涵養すると同時に、その境界を閉じていく係留地となっているという観点を提示した。

本論は、共同性概念を状況的なものとして活用すると同時に、変化のなかにあっても無軌道に広がらず一定の境界内へと収斂していく社会関係の動的側面を描く民族誌として、従来の研究をさらに展開する視座を示すものである。